

# FD とラーニング・コモンズ

## Faculty Development and Learning Commons

阿 部 秀二郎

Shujiro ABE

### Abstract

Under the influence of the concept of social participation as a basic right developed by the Ministry of Economy, Trade and Industry, Japanese universities have been making efforts to advance from a teaching-based curriculum to a greater focus on learning. However, it is important that we understand why we need to move our higher education forward before we consider how to develop this learning (FD). Our first aim is to gain wider understanding of the need to cultivate the subjective ability to think and act, followed by the introduction of new styles of learning. Next, we will read up on trends at other universities, before presenting preliminary results and our findings on the potential of new styles of learning..

### はじめに

経済産業省が平成18年にまとめた社会人基礎力は大きく三つの能力に分類され、各能力はさらに幾つかの要素に分類されている。この概念の成立過程は飯吉 [2010] に詳しいが、この社会人基礎力という概念の具体的な活用はかなりの多様性を容認するものであり、平易に言えば大学での学習カリキュラムへの取り込み方は難しい。<sup>(1)</sup> 例えば、斎藤 [2010] では、上に挙げた三つの能力そして要素において、「考え抜く力」という能力の「課題発見力」では、対人コミュニケーション上の問題が挙げられている。しかし本プロジェクトで取り組む「論理的な能力育成」で目的としているのは、大学教員がそれぞれの専門分野での研究において最低限必要とされる情報収集、情報処理、解釈、分析方法の学習を通じた考える力の修得である。対人コミュニケーションは他者の視点からの気づき、他者の気づきへのきっかけとして要求されることになる。自ずから重点は他者ではなく自己にかかってくるのであり、他者(そ

---

(1) 飯吉 [2010] はさらに、産業界や経済産業省から要請されたそれぞれ、「学士力」と「社会人基礎力」と、経済関係団体の高等教育に求める人材との関係の分析、そしてその分析から共通項として総括される大学教育における教養教育への期待について展開する。

して他者とのコミュニケーション)が強調されることは逆に、論理的に考え抜く力をも阻害しかねない。

論理は、他者との対話にとって必要な道具である。しかし、この論理というものはフランシス・ベイコンが中世まで支配していたアリストテレス論理学に注意を促して以来、容易く手に入れることができるものではないことが理解されてきた。「感覚への疑い」、「個人の殻への疑い」、「言葉への疑い」、「権威への疑い」<sup>(2)</sup>を通じて、慎重に観察し批判的に考え続けることだけによって、論理が洗練されるとするならば、他者との対話すなわちコミュニケーションを適切な道具によって管理するのは決してたやすいものではない。時には不適切な道具の方が他者との対話が成功する可能性もある。ここに「考え続ける(考え抜く)」ことと、その具体例として対人コミュニケーションにおける問題が挙げられることとのズレがある<sup>(3)</sup>。

このズレにも意識しながら、これまでの活動と今後の可能性について指摘したい。

したがって、本稿で取り上げる内容は、次の3点である。

1. これまでの問題関心
2. 関心に基づく調査方法・調査
3. 今後の可能性

## 1. これまでの問題関心

### 1-1. 学習意欲の動機づけ

「はじめに」に挙げたが、著者は「社会人基礎力」としても重要視されているコミュニケーションという概念の奥行きをこれまで意識してきた。理由は著者と学生との関係の変化に求められるのであり、したがって著者自身にあるとも言えるし、学生にあるとも言える。具体的に言えば、著者が担当する専門科目の授業で著者が解説する内容がほぼ毎年同じ内容であるのに対して、試験での学生の回答が劣化してきた。その原因として学生との対話が実質的には成立してきていない原因が大きいと分析した。つまりコミュニケーションの欠落である。著者の解説する内容が同じであるとすれば、問題は次になる。著者の意欲・学生の能力・学生の意欲。明確に判断できることは、著者の意欲である。いくらか低下してきていることは確実であった。したがってコミュニケーションを成立させる要素として、コミュニケートしようとする意欲が大きなものであることは確実であると分析した。本プロジェクトにおける「言語を用いるコミュニケーション」をどうにかする以前に意志・意欲の問題についての議

(2) ベイコン [1620], 84-86 頁参照。一般的また翻訳では順に、「種族のイドラ」、「洞窟のイドラ」、「市場のイドラ」、「劇場のイドラ」とされている。参照者により本文のように解釈を行った。

(3) もちろん多様なコミュニケーションが成立する条件には、論理以外にも他の要素が必要である。それらの要素の存在を認めながらも、その中における高等教育機関としての重要な役割をひとまず論理と捉えるものである。岸田 [2011] では、コミュニケーションの論理以外の要素の重要性を指摘し、かつ大学教育の方向性にまで言及している。

論が必要ではないかと言う認識が存在した。

そして、その後学生との対話を注意し、教示すべき内容と根拠とを意欲を持って伝えるように意識することで、学生の回答の劣化は目立たなくなってきた。この点だけを見ると学生の能力・意欲に変化はなく、教員の意欲だけが問題であるように思われるが、上に記したように専門的な知識について、その前後又は背後の追加的な解説が必要になるという点で、学生の意欲に対して以前よりも多くの働きかけが必要になったとも指摘できる。また著者の専門科目に限定されず、学生には選択する余地のない学部の基礎科目(基礎演習Ⅰ、Ⅱ及び情報基礎演習)の学生の学習状況を考察すると、学生の論理的思考力や意欲は以前よりも格差が拡大していると思われる。こうして全体的な学生の意欲をさらに引き出し、部分的な学生の能力や意欲を特に高めなければならないという課題が存在する。

批判的思考力も含んだ論理的思考力と意欲との関係性について、前田等[2011]によって指摘されているように、中学生段階でも把握されている。学習意欲低下の原因については様々な指摘されているが、適切な原因把握がなされない限り、適切な対策は望むことが出来ず、結果的に能力の向上も望めない。その点で、学習意欲の内発性を主張するかどや[2008]の問題関心は、重要であると思われる。佐藤学や内田樹の認識を前提に置いた、有益にはならない「学びからの逃避」から来る教育の虚無感に対峙し、学習意欲を内発的に高める必要性が指摘されている。

したがって、すでに初等中等教育から学習意欲と学力に関係する課題は存在していることになるが、高等教育機関の増加に伴う大学への入学者の増加、大学生の学力問題の提起、国立大学法人化の中で、この課題は高等教育機関においても重要なテーマと認識されるようになった。学習意欲の向上を内発的に高める手段として「アクティブ・ラーニング」という言葉があるが、この言葉の多義性や曖昧さについてはすでに研究者によって指摘されており(溝上[2007]、須長[2010])、また言葉の曖昧さはさておいても、市川[2006]や齋尾[2010]が指摘するように、グループによるディスカッション・報告活動というアクティブ・ラーニングだけでは、学習意欲を高めることが困難であるという指摘もある。

したがって、一方では須長[2010]が指摘するように、「activeness」をどのように把握・彫琢していくべきかという問題と その問題解決のために和歌山大学では何ができるのかという問題が存在し、その問題を踏まえた上での対策が重要だと思われる。前者についての議論が必要である理由は、その概念の把握次第では、社会の要請と大学の解釈との間のズレが学生に不利益をもたらす可能性を持つからである。ここではひとまず須長[2010]が解釈する下の把握に従ってみよう。

「まずは主体性や当事者意識を引き出すことを重視し、学習への動機付けを高めることで、学習過程への関与の深さを高めることを足がかりにしながら、次第に関与の広さ、全一性の高さを高めてゆく」(pp.7-8)

次に解釈なりに多様性が存在することも認めうるならば、和歌山大学ではこの把握からどのようにズレを生じさせるかという彫琢である。和歌山大学の場合首都圏の大学とは異なり、「地域」という概念を省略することはできない、その点で「地域」の特徴を把握し地方政府と関連していくことが必要になる。他方で「地域」はグローバリゼーションの中で展開する必要があることから、世界的な視点と地域的な視点の両方に配慮をするバランス感覚が「主体性」と関連付けられる必要がある。

この必要性を理解する時には、積極的かつ自発的に行動しようとする動的な「主体性」も重要だが、様々な人の意見や考え方に耳を貸すという「聞く」、「読む」という静的な「主体性」がより重要になると思われる。具体的には、「調べる」、「話す」、「書く」という動的な作業の中に、調べたもの・書いたものを「読む」、他人が話すことを「聞く」、という静的な作業が必要不可欠なものとして存在する。動的な「主体性」は、静的な「主体性」の洗練化がなければ意味がないし、後者の洗練化は高等教育機関である大学卒業まででトレーニングを十分に積む必要があるからである。

そして静的な「主体性」を洗練化するためには、「当事者意識」の醸造が必要である。「当事者意識」を有することで静的な「主体性」の洗練化のトレーニングに対する苦痛感が減少するからである。そしてその具体的な方法は、具体的な学習コミュニティを形成することでその一員であることを学習者は認識することで当事者意識を有する方法であり、この方法は第三者である授業の教員、先輩、同輩（ピア）の存在が重要であろう。

しかし具体的で断絶する授業の中での学習コミュニティにおけるトレーニングだけでは、十分ではない。学生が継続的にトレーニングを行っていく空間に滞在することによって、「主体性」についての動的性と静的性とのバランス感覚の必要性を確認し、静的な「主体性」を洗練化することを主体的に行うことができるようになると思われる。

前者の教員、先輩、同輩（ピア）による関わりは、演習を始めとする授業や授業を提示するカリキュラムや手段等についての全体的な FD 活動と関連するものである。本稿では、FD も視野に入れながら、後者の学習空間を具体的には図書館における「ラーニング・コモンズ」と位置付け、その場所についての他大学の動向の調査を踏まえて、可能性を模索していく。

## 1-2. ラーニング・コモンズ

「ラーニング・コモンズ」という言葉は、大学図書館で 2006 年の米澤が紹介してから瞬く間に、大学図書館に広まった。（米澤 [2006]，原・加藤 [2009]）

この「ラーニング・コモンズ」は、ビーグル [2009] によると、1980 年代半ば以降に生み出された世界的規模のコンピュータネットワーク上での仮想的なコモンズである「インフォメーション・コモンズ」が端緒であった。その仮想的コモンズに公益を目的とした知識創造を行う文化的コモンズとして、それまでの紙媒体の情報蓄積の場としての図書館で具体

的に展開されていった。その過程は必然的に進行したのではなく、物理的空間としての図書館の来場者数はむしろコンピュータネットワークの展開とともに減少する傾向にあった。しかし1995年頃からコンピュータネットワークを利用しながら、紙媒体の情報を利用する場所として図書館を利用する試みが登場し(物理的なインフォメーション・コモنزの登場)、その後図書館における各種情報の集中化が学生の学習と結びつくことで、「インフォメーション・コモنز」から「ラーニング・コモنز」が登場することになった。

このようにコンピュータネットワークと言う情報伝達手段の展開とその帰結としての「ラーニング・コモنز」は上にも指摘したが、図書館の存在意義という視点から拡大・展開したという認識が正しいだろう(茂出木[2008])。したがって「ラーニング・コモنز」について、歴史・図書館の改革という側面から論を起こしている論文は多くあるが、「ラーニング」という視点から、深く分析している研究を著者は認識していない<sup>(4)</sup>。

そこでいささか折衷的ではあるが、1-1.に指摘したようにFDの一部としての「学習意欲向上」と「動的・静的な主体性」とに関する、「ラーニング・コモنز」の可能性を模索することにする。

## 2. 関心に基づく調査方法・調査

時間と予算の制約の中でターゲットに絞ったのは、次の3つの大学図書館である。

1. 名古屋大学付属図書館
2. お茶の水女子大学付属図書館
3. 上智大学図書館

1. 名古屋大学付属図書館は、参考文献にも挙げているように、意欲的に「ラーニング・コモنز」と関わってきており、日本でも最大規模の「ラーニング・コモنز」を有するという特徴が挙げられる。2. のお茶の水女子大学付属図書館は、国際基督教大学、東京女子大学と並んで早くから「ラーニング・コモنز」を導入した図書館という特徴がある。3. の上智大学図書館は「ラーニング・コモنز」とアカデミックライティングという学習支援について、力を入れている図書館という特徴がある。

### 2-1. 名古屋大学付属図書館(訪問日2010年12月27日)

#### 1) ラーニング・コモنزについて

読み書きの授業で学生の学力をボトムアップさせる試みを展開しており、ラーニング・

---

(4) 学習支援という面から図書館について、論じているものに、永田[2009]や呑海・溝上[2010]がある。また本号の藤木論文(藤木剛康「課題解決型学習の可能性」)、金川論文(金川めぐみ「問題解決型学習の具体例」)で取り上げる「PBL」の取り組みを展開している三重大学においては、ラーニング・コモنزを「PBL」と関連付けて展開しようとしている(原・加藤[2010])。

コモンズという昨今の図書館の動向を踏まえつつ、試みの展開に役立つことができる何かを模索したために、見学に来た旨を担当の情報サービス課課長補佐黒柳様に説明をし、それについて導入の課程・予算等についてヒアリングを行った。

名大の場合、前館長がリーダーシップを取り、図書館の存在意義を知らしめる目的で数年前から「ラーニング・コモンズ」の導入を図ってきた。その際に前館長の貢献が大きい。学生から図書館の利用についてもアンケートを募り（例えばコンサートを行うなど）、実現もさせてきている。開館時間は8時から21時半まで（これも前館長の音頭）で、夜間には、カウンターにアルバイトの大学院学生が雇用されている。

この「ラーニング・コモンズ」を建設する予算は、前館長による学内予算配分競争でも勝ち抜いた実績は大きい。可動式の机が1卓10万円程度するが、これが20台以上は存在した。さらにプロジェクターや稼働可能な電源設備もかなりの金額になる。

名古屋大学の付属図書館は、グリーンベルト（植物が沢山生えている）地帯にあり、そのベルトを真っ直ぐに西へ向かえばJR名古屋駅の前の大通りにたどりつくように出来ている。つまり名古屋大学でもシンボリックな場所に位置している。そのような場所でのラーニング・コモンズの大規模な工事は、周知するまでもない。また入口は2階となっていて、入り口を入るとすぐに「ラーニング・コモンズ」なので工事も目の当たりに出来、宣伝効果も高かったと言える。

利用する学生については、全学部の学生が一般的に利用している。学生数の中で最も多いのが工学系の学生だが、これらの学生は研究室に配属が決まると、そちらで過ごす時間が多くなる。

授業は、次ページの写真①に出ている、セミナールームAまたはBを教員がゼミで利用することがある。また、図書館の講習会（結構頻繁に行っているよう）で、「アカデミックライティング」の講習も行ったことがあるとのこと、読み書きという学習支援を「ラーニング・コモンズ」の一業務と認識している。

## 2) ライティング・センターについて

学部の1年生で基礎セミナーという授業があり、その授業では、「毎週」レポートを書かせる。ただ添削を行っているのか、どの程度の長さ等のレポートかなどについては、教員の裁量が働いており把握できていない。

また、図書館などに集積された情報収集方法などについての授業は、TAの大学院学生を利用して、基礎セミナーの教員から要請があり次第、設定することになっている。学生が基本的に図書館内を案内し、説明することになっている。

そしてこの案内・説明は、1年次入学当初に行ってはあまり意味がない。また、必ずしもすべての教員がこの説明を図書館に依頼するわけではない。

大学院学生向けには、英語のライティングの授業がある。これは大学院生を教える語学系の教員が「ライティング・ユニット」を構成し、英文での論文 (abstract, summary) をチェックする授業がある。英語でのロジカルチェックが主である。

次に、「ライティング・センター」は、やはり研修を受けた大学院学生が総合サポートセンターに決まった時間駐在し、学生から相談があり次第対応する。

下の写真②にあるように、机に二人が並んで座れるようになっている。モニターで文書またはグラフを見ながら、指導を行うことが可能になっている。ただ、具体的にどこまで教えるのか、「気づき」を重視するのかどうかなどの、明確な指針は不明。利用時間帯は、基本的に学期内の15:00～19:00という時間帯の制約もあってか、実績については、そこそこ、ということ。



①



②

## 2-2. お茶の水女子大学付属図書館 (訪問日 2011年1月17日)

### 1) ラーニング・コモンズについて

読み書きの授業で学生の学力をボトムアップさせる試みを展開しており、ラーニング・コモンズという昨今の図書館の動向を踏まえつつ、試みの展開に役立つことができる何かを模索したために、先進的にラーニング・コモンズを展開させている大学を見学に来た旨をお茶の水女子大学付属図書館図書・情報チームリーダー江川様に説明した上で、ヒアリングを行った。

二つのポイントがある。

①創設：お茶の水女子大学の前チームリーダーによる仕掛けづくりと、そのチームリーダーに仕事をさせた当時の館長（現学長）の発想との貢献

②展開：前チームリーダーの仕掛けづくりを維持、発展させるための努力の貢献

①については、大学図書館問題研究会主催の第17回オープンカレッジでの前チームリーダー茂出木理子氏の講演「ラーニング・コモンズでお茶大図書館は何が変わったか!？」(『ラーニング・コモンズ ～学びの場の新しいカタチ～』(第17回オープンカレッジ報告

集), 25) と, 参考文献に挙げている同氏の論文「ラーニング・コモンズの可能性: 魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ」で把握することができる。

現チームリーダーに聞いたところ, お茶の水女子大学の現学長羽生氏が図書館長の時に, 図書館改革を進めたということであった。哲学を専攻されている羽生氏によるリベラルアーツ教育としての大学の存在意義と大学付属図書館に対する重要性の認識の貢献は大きいと江川氏は指摘していた。さらに, 言うまでもなく羽生氏の理念に基づき施策を実行した茂出木氏の次の貢献は大きい。1. ラーニング・コモンズ, 2. キャリア・カフェ, 3. LiSA (Library student assistant)

その中で特筆すべき点は, 図書館であるにも関わらずコンピューターなどを利用した情報検索, 文書作成等の作業条件が整理されていることが挙げられる。情報基盤センターという本学で言うところの, システム情報学センターを有しながらも, コンピューターの台数では, 図書館の「ラーニング・コモンズ」が他の各施設(教室)と比べて多く, 全体の30%を有する。下の写真からもパソコンの台数の多さが確認できる。もちろん無線LANも設定されており, 学生は電子媒体と紙媒体での情報を自在に活用しながら, パソコンで作業を行える。これらの管理は, 情報基盤センターが担っている。

Mac 40 台, Win 30 台, カラープリンター・コピー機 1 台が設置してあり, 大学院生の TA (ラーニング・アドバイザー) が常駐しており, パソコン使用時の問題等に対応する。しかし TA は情報の内容等についての質問には対応しない。



③



④

## 2) ライティングについて

お茶の水女子大学付属図書館では, 今後図書館としてライティングに力を入れて行かなければならない認識を有してはいるが, 学内で火急の問題として取り上げられてはいないために, 動きは鈍い。したがってアカデミック・ライティング・センターのような存在は現在模索されていない。

大学の授業では, 少人数制のゼミにおいて, 教員の指導の下に学生が論文を作成するが,



日本語能力、語学能力において指導教員から問題点が指摘されることはそうはない。これは、お茶の水女子大学の学生の質の良さを物語っているかもしれない。実際にお茶の水女子大学のFD(教育開発センター)活動は、読み書きという点よりは、学士力の育成やリベラルアーツというお茶の水女子大学の専売特許をどのように高めるのかという点に傾斜している。

こうして読み書き能力の育成は、個々の教員の指導に任されている部分が多いとはいえ、図書館は次のようなスキルを職員が有しており、それを出前授業で行っている。そのスキルは、教員から要請のあったテーマに対し、学内に存在する情報の活用方法について、講義するものである。

そしてこの講義は、初年次の7月頃と3年次の後半頃に集中するという。さらに初年次の場合、情報の紹介的な講義が求められるのに対して、3年次ではかなり突っ込んだ情報の利用方法についての講義が求められる。

また指導教員から、個々の学生のライティング能力育成の必要性について聞く機会もあるとのことであるが、だからといって火急の問題ではないという認識にある。しかしお茶の水女子大学は3分の1の学生が、大学院学生であることを考慮すると、これらの学生がTAとして、学部学生の論述スキルアップを図る計画を立てることは他大学よりも容易かもしれないし、潜在能力は高いだろう。

## 2-3. 上智大学図書館(訪問日2011年1月17日)

### 1) ラーニング・コモンズについて

読み書きの授業で学生の学力をボトムアップさせる試みを展開しており、「ラーニング・コモンズ」という昨今の図書館の動向を踏まえつつ、試みの展開に役立つことができる何かを模索したいために、「ラーニング・コモンズ」を展開させている大学を見学に来た旨を、上智大学学術情報局図書館事務長後藤様、主幹柳澤様、情報サービスチームチームリーダー久保様に説明した。

久保様から、メールでご連絡を頂いていたのは、読み書き能力向上のための施策というものを図書館は持ち合わせていないということ、学術支援室という読み書きに関する情報提供を行う場は設定しているものの利用者が非常に少ないという事情をご説明いただいた。さらに久保様の配慮により、上智大学国際教養学部存在するアカデミック・ライティング・センターの上智大学国際教養学部准教授中野様に質疑する場を設定して頂いた。

「ラーニング・コモンズ」は2009年の9月に完成され、その後学生の利用率は非常に高い。その背景については、そもそもキャンパスの特殊性にある。上智大学図書館は四ツ谷に存在し、非常に狭い。

附属図書館は、敷地の中でも最大面積の建物として中心的存在であり、出入りする学生

数が非常に多い。したがって学生はレポート等の作成等目的以外にも、居場所として図書館を利用している可能性が高い。そのような居場所に「ラーニング・コモンズ」という空間が創造されることで学生は、より居心地の良さを感じている。

学生の居場所として高い利用率を誇る「ラーニング・コモンズ」に対して図書館職員も好ましいと感じている。

またお茶の水女子大学同様に、「ラーニング・コモンズ」には貸与可能なノートパソコンが30台準備されている。そしてこのパソコンは、民間の業者が入って管理を行っている。上智大学には総合メディアセンターという本学のシステム情報学センターに類似するものがあるのに、民間の業者によってパソコン管理が行われていることは、お茶の水女子大とは正反対である。しかしこのパソコンの稼働率は高く、かなりの学生が利用している模様であった。

「ラーニング・コモンズ」内には対面式の「学習支援ブース」(写真⑤)がある。この学習支援室には、専門的な領域を背景に有する大学院学生がTAとして常駐している。

## 2) アカデミックライティングについて

上智大学では、卒業論文が義務化されている学部とそうではない学部とが併存している。そのような客観的事実について図書館職員は認識しているが、学生の読み書き能力についての問題は把握されておらず、また図書館職員としてそれとどのように関わるべきかについてあまり考慮されていないようであった。この原因には教員と図書館職員との間でのライティングに関する協業の意識が高くないこともあろう。お茶の水女子大学で行われていたようなレポート・論文作成のための学内情報の利用方法などについて、図書館職員ではむずかしいという返事が返ってきた。教員による他大学の動向や要望伝達と図書館職員による研修会等の機会は時間的余裕がないという事情も指摘された。

しかし、「ラーニング・コモンズ」内に設置した学習支援室(「アカデミック・ライティング・センター」)の必要性について問題意識が存在すること、さらに、昨今の図書館を取り巻く事情についての認識が存在することから、久保様が設定された国際教養学部の中野晃一准教授にお話しを伺うことにした。

国際教養学部は、1987年に全国で初めて英語だけで授業を行うプログラムを展開した比較文化学部を前身としており、現在でも英語で授業が行われ、学生の多くは外国人学生、3割は留学生で占められている特殊な学部である。この学部ではTAを利用し、グループワークでの授業を活性化したり、インターンシップなどでの学生支援を行う以外に、大学院生のTAを利用し、学部学生に英語でのライティングサポートを行っている。

TAであるが、年度が始まる前に募集をかけて、選抜をする。この選抜はインタビューという方法で、学生の能力を推し量るものである。これについてインタビューだけで十分

かどうかを質問した。立ち上げ当初は優秀と思われる学生に声を掛けていたが、現在ではインタビューに拠る選抜でも十分であると回答された。選抜を通過した学生に対しては、ライティングについての簡単な講習を受講してもらうようである。文法の間違いや論理的な間違い、不十分さなどについて指摘してもらうことを求めているとのことである。ただ内容に立ち入った質疑応答は専門が一致するTAの場合には、回答しているとのことであった。

アメリカで先行的に行われているライティングサポートを踏襲しており、学生とTAとはやや斜めで対面すること、このTAと学生とのマン・ツー・マンでサポートをすることになっているとの事であった(写真⑥)。複数のTAが関係する可能性について質問したが、あまり考慮されていないようであった。

上のような質問をしたのは、本学で読み書きの能力をレベルアップさせるための大学院生の利用は困難であることを指摘し、学生同士でのピアサポートの可能性を議論したかったからであるが、この点について可能性はあるのではないかとということであった。アメリカの先例に倣っており、可能性について考慮していないというだけであるとの回答であった。こちらからの提案として、例えば、TAによるサポートを映像化し翻訳化することで、もちろんそのままうまくいくとは考えられないが、そのノウハウを日本語でのライティングサポートに提示することができるかもしれないと指摘すると、現にそのサポートの様子を他のTAや授業で見学することもあるとのことであった。いずれにしてもTAまたはピアをする学生の質を一定以上のレベルに保てないとならないという認識は共有した。

また、TAと学生との相性の問題も存在するともお話しされていた。さらに事務職員としてボランティアで働いてくれる卒業生の存在が大きいことも指摘されていた。実際に、この職員がTAと学生の窓口になり、双方の関係を調節していることが大きいだろう。



⑤



⑥

### 3. 今後の可能性

2. で各大学図書館の「ラーニング・コモンズ」の調査をまとめたが、1-2. で記したように、「ラーニング・コモンズ」導入が「インフォメーション・コモンズ」から始まったこともあり、図書館内での情報検索を集団で行う空間の醸造が中心になっている。

逆に「アカデミックライティング」という仕組みは、図書館という空間に未だ溶け込んではいないように思われるし、図書館職員も今後の可能性について模索し、主体的な学習を土台に据えようとするFD活動の面からも、1-1. で指摘した「アクティブ・ラーニング」と「ラーニング・コモンズ」を実質的に結合することは、教員と大学図書館職員との認識の共有化や教員のFD活動への職員の参加などを通じて、可能かつ必要になると思われる。

その際に必要なのは、学習者であり利用者である学生、知識サービスの提供者であり研究のファシリテーターでもある教員、知識情報サービス提供者であり学習のファシリテーターでもある職員の三者協同型のFDまたは空間の創造という方向性になる。

#### 3-1. FD

FDという枠内において先駆的に展開しているのが、関西大学である。関西大学の大きな特徴は、上の展開に関連する学生の種類が4種類存在することである。まず、初年度教育等において、学生のラーニングを引き出すピアに近い存在としてのラーニングアシスタント(LA)が存在する。この学生は主に議論や学習をファシリテートする。次に、それらの学生に対してファシリテートの役割を教え、学ばせるための仕掛けを設定するのが大学院学生中心のアドバイザースタッフ(AS)である。それ以外に教員の学習をサポートするティーチングアシスタント(TA)とステューデントアシスタント(SA)が存在する。5そしてこれらの学生のコーディネートを行うのが職員の役割である。2-3. において紹介した上智大学の中野先生、さらにお話しを伺った関西大学の須長先生ともに職員の役割の大きさを指摘されていた。

関西大学の三浦[2010]が指摘しているように、アメリカ同様にこれまでの大学の役割における比重が「研究」から「教育」へ、「教育」から「学習」へと展開し、学生が入手する「知識」を「学生自身の version」に高めることが重要であるという前提に立てば、関西大学が行っているような学生の学習をきめ細かくファシリテートするラーニングアシスタントと、その存在を機能的にするアドバイザースタッフさらに背後で支援する職員の存在は自ずから大きくなる。

こうして1-1. に指摘した静的な「主体性」を洗練化する手段として、「ピア・リーディング」や「ピア・インストラクション」などのように、「学生同士」という学習者にとって自らと近い存在の中に学生を位置づけることで「当事者意識」を持たせることは重要ではある。

<提言>

そこでFDについては、「ピア」を導入する「読み」「聞き」のトレーニングを行う授業がまず必要となる。さしあたっては「ピア・リーディング」「ピア・リスニング」になるのか。そして「ピア」活動とその「ピア」活動を支えるトレーニングされたファシリテート能力を有する学生または大学院生を生み出す仕組みが必要になる。そして教員も含めた上で、それら全般に渡る講習会や勉強会、他大学の視察が必要になる。特に関西大学そして金沢工業大学などの先進的な大学への視察がまずなされるべきであろう。そしてこのころみは、大学全体として実行する可能性も有する。つまり学部を隔てない可能性を模索していく必要がある。

3-2. 「ラーニング・コモンズ」

3-1. にFDについて見てきたが、1. でも指摘したように、それだけでは不十分である。つまり、近い存在の視線を利用する動機付けだけでは、継続的で深遠な学習へと結びつくような習慣を生み出すことにはならない可能性がある。

そこで、具体的には図書館の「ラーニング・コモンズ」を生みだし、学生が継続的に学習していける環境を生み出すことが要請される。これまでの「ラーニング・コモンズ」が「インフォメーション・コモンズ」から展開してきたという経緯は理解できるが、ビーグルの定義を利用しながらベネットが次のように指摘するように、何か入るかという物理的空間の創出よりも、何を提供するかという学生の学習を支援するための大学教育の指針と関連させるべきであろう。

「その（「ラーニング・コモンズ」の）成功は（図書館や大学コンピューティングのような）支援・サービス部署による協力関係のみならず、当該機関の学習目標を策定している大学の部署の関与によって決まる。適切に理解したとすれば、図書館員や大学コンピューティングの担当者だけではラーニング・コモンズを設置することができない。というのは、彼らは機関の使命（mission）を支援するが、策定できないからである。」ベネット [2008], p.47

<提言>

大学付属図書館は、この時代の要請として学生の主体的な学習を支援するための、「ラーニング・コモンズ」を生み出す必要がある。学習に関するヴィジョンを大学は提示し、図書館職員と教員とで具体的に計画を練っていく必要がある。2. で見た名古屋大学、お茶の水女子大学、上智大学はいずれも和歌山よりも都会にあるが、インフォメーション設備の充実もあり図書館は学生に利用されている印象を受けた。和歌山大学はそれらの大学よりも田舎に位置する。ゆえにインフォメーション設備を充実させ、学生が「たまる」場所を提供することで、これまでよりも多くの学生が利用することにはなるだろう。しかしその場を上

FD 活動と連携する形で展開しようとするならば、幾つかの仕掛けが重要であると思われる。

「ピア」での活動を支援することから、数人数によって形成される「学習コミュニティ」の形成を促すための、自由に学習し語ることのできるスペースとコンピューターと書籍とが入りやすい状況を「ラーニング・コモンズ」内に設定する必要がある。これらの活動を自主的に行うことができている学生はすでに主体的な学習の出発点に立っていると言えるが、その地点まで到達できない多くの学生に「学習コミュニティ」の形成を促すための措置として、1年生の後期に行われる授業（経済学部の場合基礎演習Ⅱ）において、教員が図書館においてファシリテーターとなった授業を展開することが考えられる。最初のうちは、その授業には研修を積んだ図書館職員も参加することが考えられる。図書館職員では賄えなくなる事態を想定し、学部学生や大学院生にも研修を積ませてファシリテーターとして配置することが考えられる。ファシリテーターとしての役割において肝心なことは、学生が「聞く」「読む」ことを主体的に展開する機会を設定することである。この役割は学生の動的な「主体性」と静的な「主体性」との関連の重要性を学生が理解していくためには重要なトレーニングである。

学生が2年生になったときには、自発的な「学習コミュニティ」の活動を「基本演習」などのような形で、行わせる。ここにおいて教員は現在の自主演習におけるような存在と位置づける。ここで活躍するのは教員よりもむしろ図書館職員になる。つまり図書館職員は、これらの自発的な「学習コミュニティ」の活動について把握し、相談に乗る。場合によっては他の「学習コミュニティ」を紹介したり、合同で作業をするなどのファシリテートを行う。学生が3年生、4年生になったときには、ゼミを「ラーニング・コモンズ」内で行うなどの方法も考えられる。

こうして継続的に「ラーニング・コモンズ」を学生の学習と関連付け、学生の学習にはだれかがファシリテーターとして関連することで、学生の主体的な学習は洗練化されていくと予想される。

スペースとしての有益な「ラーニング・コモンズ」を作り上げていくためにも、教員と職員と学生の協働が必要である。また、ファシリテーターとしての人的資源の構築もやはり重要であり、そのノウハウの蓄積が重要であると思われる。そのためにもやはり教員・職員・学生のFD・SD活動が重要である。そのためにもまだまだ他大学及び他大学図書館への視察と連携が今後必要であると思われる。

謝辞：本稿を締めくくるにあたり、2. で調査させていただいた名古屋大学付属図書館職員の黒柳様、お茶の水女子大学付属図書館職員の江川様、上智大学図書館職員の後藤様、柳澤様、久保様、アカデミック・ライティング・センターの中野先生にお世話になったことを感謝する。さらに関西大学の須長様にも刺激を頂いたことをお礼する。

参考文献

- 飯吉 [2010]: 飯吉弘子「産業界のイノベーション要求の方向性と大学教育」『大学教育』(大阪市立大学, 第8巻, 第1号) 2010年9月
- 市川 [2006]: 市川真一「第3章 学力論争における国際学力比較調査の役割」, 21世紀COEプログラム東京大学大学院教育学研究科 基礎学力研究開発センター 編, 『日本の教育と基礎学力』, 明石書店 pp.53-69
- 加藤 [2009]: 加藤信哉「ラーニング・コモンズをもっと知るために: 図書と雑誌論文の紹介」『名古屋大学附属図書館研究年報』7, pp.63-67, 2009年4月3日
- かどや [2008]: かどやひでのり「教養教育の再構築」『Journal of JACT』, Vol.13, No.2, pp.97-102, 2008年
- 岸田 [2011]: 岸田一隆『科学コミュニケーション』平凡新書, 2011年2月15日
- 齋尾 [2010]: 齋尾恭子「『個性』は学びへのモチベーションとなるか」『関西大学高等教育研究』創刊号, pp.47-55, 2010年10月31日
- 須長 [2010]: 須長一幸「アクティブ・ラーニングの諸理解と授業実践への課題」『関西大学高等教育研究』創刊号, pp.1-11, 2010年10月31日
- 斎藤 [2010]: 斎藤寧「『社会人基礎力』の詳細展開—能力要素の「熟達度」の雛型形成とその活用—」『比治山大学短期大学部紀要』, 第45号, pp.15-25
- 呑海・溝上 [2010]: 呑海沙織・溝上智恵子「北米の大学図書館における学習支援空間の歴史的変容 - プリティッシュ・コロンビア大学の事例から」『カナダ教育研究』8号, pp.1-17, 2010年5月
- 永田 [2009]: 永田治樹「大学図書館における新しい「場」: インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ」『名古屋大学附属図書館研究年報』, v.7, pp.3-14, 2009年3月31日
- 原・加藤 [2010]: 原郭二・加藤彰一「410 大学図書館のコモンスペースの利用とPBLの導入に関する研究: ラーニングコモンズのファシリティマネジメント研究 (D. 建築計画)」社団法人日本建築学会『東海支部研究報告集』48号, pp.373-376, 2010年2月20日
- ビーグル [2009]: ドナルド・ビーグル (三根慎二訳)「ラーニング・コモンズの歴史的文脈」, 『名古屋大学附属図書館研究年報』, 7巻, pp.25-34, 2009年3月31日
- ベネット [2008]: スコット・ベネット (加藤信哉編訳)「論説: インフォメーション・コモンズあるいはラーニング・コモンズ: 私たちはどちらを持つのか?」『ラーニング・コモンズ基本論文集』(株)成文社, pp.47-51
- ベイコン [1620]: 桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム』岩波文庫, 1978年6月16日
- 前田等 [2011]: 前田健一・新見直子・加藤寿朗・梅津正美「中学生の批判的思考力と社会的事象に対する関心・意欲および社会的態度」『広島大学心理学研究』(10), 89-100頁, 2011年3月31日
- 茂出木 [2008]: 茂出木理子「ラーニング・コモンズの可能性: 魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ」『情報の科学と空間』vo.58, no.7, pp.341-346, 2008年7月1日
- 米澤 [2006]: 米澤誠「動向レビュー: インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ: 大学図書館におけるネット世代の学習支援」『カレントアウェアネス』(289), pp.9-12, 2006年9月20日
- 三浦 [2010]: 三浦真琴「Active Learning の理論と実践に関する一考察 LA を活用した授業実践報告 (1)」『関西大学高等教育研究』創刊号, pp.25-35, 2010年10月31日

溝上 [2007] : 溝上慎一「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』第7号 (pp.269-287), 2007年